三省録 五

幼教女訓

和書門 類 一六六七五 號 一八一 函 一 架 一〇 冊

内閣文庫 和書 類 一六六七五 號 一〇 冊 一九〇 函 二一 架

内閣文庫		
番號	和	16675
冊數	10(5)	
函號	190	238

国立公文書館 National Archives of Japan

日本政府図書

三省録附言下

軒のしのぶ

浅草文庫

志賀忍輯

○武の塩硝下々迄も心掛べし家中のものは常に事ある日の為に心掛すべし
して居る場へ持出しまじきものなれば中小性の挟箱持などは入る場
の辺を徘徊したるが塩硝を持出しければ音もなくわづかに挟箱
かくる場へ捨置きて逃去たる塩硝ありしが見えて此挟箱を
注意のうちにかしこまりねども借用して手もちいづれの会釈しくく
腰に掛けたるものなれば好みに取おけさせて見たしと
急なる所にて和ごたる草鞋の足あやまりたるは塩硝なる所
雑の外機嫌よく其挟箱のうち呼出しては其方の口上の
武士の腰の急ならぬは武辺の心得なりとぞ是のもの草鞋を

武田才一のいへのこと書方不掛手をもちてえらみ焼すてしを見るに
しかるげに読しかれば加増一十石をとて其の場にて某二拾
石加増被下置しとぞ　明良洪範

○西山公君のいはくつらつら天下国家の事を思ふに士庶人に至るまで
倹約なく才一の徳を以て今や天下久しく穏やかに治まりて人々奢りへ
ずまして代々衣服のうき鞍腰刀のこしらへを始めとして器物食物
家作に至るまで男女ともに奢侈の事をのみ好むゆゑ家国用
家費たらずして是をもつてしのぐるより人の心ろをも困じ
らせず唯栄華にのみなりゆきて奢りを好むよりその風俗
おのづから下に及びてあまねく世の人々の進退に美をつくし
しまひにその執りたる者の業をあまるまでもなく美を極
なほあきらかに此むげの奢をはらふ法の風俗一度起りては
その後は天下の窮困となるなり元より泥着清を好み治まる代より
治国の手伝をかへる弱きを拙き国の萬金をも費して国々窮迫
故に宝士農工商をはじめとしてかゆるがす一国の困窮となるも治世
久しく安きに馴れしこの世もおのづから奢の俗弊となりてこそ
あるなれとぞ漢の文帝は節倹をもて天下を治めし故
に天下の民みなよく其の奢りを得たる業をのみなりはひてなき
もろもろ人々の目をもてかくして身を持ちはかりたてなり
士庶人の狭き内にても猶しかくは倹約をなさずまだ
親類をすみちをたすけ子孫に芸術をも教えるまじ
このつずけ但し節倹と吝嗇とはまぎらはしいとよく能く

無下なりし合璧を経は上でよる人をば法人なりかはあらる
そのうち親類朋友まで川ましくのかば人倫の義理をわするゝ
のるなりなおさらしやうに教を論する者はいはでたゞ十が一をも
ぶは知ぬえ侍らずに大宗如是なさでかも守る侍りぬ　平山紀聞

○唐土元は明のむかしを服たりし清のむかしは清の白ら
清もまたいはさになる時あるも当百世ちいかに損益もあることろ
知るべしと孔子の語にあれど今日より千歳の後も
如く移りかはるいかに変ぜしと筆とり法るし
このかく武内宿祢の大学論語を読きより支那の大体
稗田の仏教がてもて沙汰もなし儒仏二教の大なるに
さへ皆やうにてんでるまずの中よしもとまより小なるものわざん

なきものなし一日もなくてかなはぬ茶も又六百年以来の綱子は百年余ときんなり

茶は伝教大師の入朝の茗茶の種を持て帰り給ふ又十二代嵯峨天皇の御時に江州坂本の茶園のはじまりなり是より種をもて植させたまひ十三代土御門の宇に栂尾の明恵上人にも種をうへさせ給ふ建仁寺の栄西禅師栄西入宋ありて帰朝のとき茶の種を持来りて梅尾に植そまきし世上広まるといふ

綱子は秀吉朝鮮を征せられし時出陣せる折軍勢朝鮮より香割て後茶も十年に種を伝へて長崎擦の言場に始めて植て世にひろまる

天正年中までは家々あま戸なく天文までは木綿なくこれ麻衣
斗なりしが貮百年已寛文の比より漸々宰領たち〻が始は百姓
の家く宿しあかりは夜村の次々つきその次の者と挨拶炬火
しきり守りあるまるは家中の武士其の日納涼と和るともし未深の
帯しぬ大小など帯し鑓挟など用意なく白寄する事なりしと
寛文延宝の比までは伽羅の油元結なし町人は多人ぐ総髪
又入れ事も掛を板なくて毎朝起て挿く又付髪の元上げて鬢世
今は揺ざる替など揺りそ手より彈家に迎しける百姓も皆
薬料ともち揺りる方方は糸紐など用ゆると紐とで揺るものもあり
今は古実の方とのて始まり川のは百年あまりの者の油元
結婚者さながしれどのか未稲ときの高級果篭の手石原し

水車のかゝる臼挽戸楢の焼継進物と酒の切手女小袖の結まで
このけ小姫の襟このけ義さ束本の投本小荳若の蜂蜜菖宝様
場の木戸錢まふ仏の日うらし町女の髪結ひ別て目に立
盆の日は男も女も菅笠かぶりうちは日傘かざして
うの時より赤き書包のやりめ嚢田舎のもての嫁の女
まで遊天井の突しなまる百姓の家は土間に糯摩ろく敷き
えよつ遠などまでに足より足半ていふものをみる日はみの作の
皮の笠かるのさは底寄と考ふ本あるのて古き亭が初めの
むかしのるめらいうにきそん世の有様小百姓は板縁涼みまつ
鳥も家なかりし大坂雪踏小脇の足袋あはれ衆のさに
後家旅まうれるがずなからず農業皆いとない何の村里も商ふ

その多くゆゑにして歳まりしと世の中にかはることあらざる
その價は年々に高く天文年中には來塚ほどの代銀六
十匁ほどまで延り七十年あまり寛永の頃に銀弐拾匁ばかりとな
れる七十年の後享保年中と云ふ頃は銀四匁ばかりとなれり
およそ七十年づつ寛政と成りては銀九匁ばかりとはるかに位おのづからね
うちのぬくく倍しの高直となりたるものなりとぞ多し
むかし太閤秀吉の治世のころは金借る人なくて金持
なる者難儀せしに金借金といふもの出来て世の中
貸金をしてぞ好むの悪黨なりとて刑罪ありしとぞ
将軍家譜にみえたり されば伊勢の外宮の御師某條の家
に天正年中借金證文ありしを若きものかしこの不足にして永

當人さへ無くて有益もとあるは證文さへとれば時代の人なる
借るものかぞ今ぞこれの金借りかる人は大いなるとも
と恥辱と思ふまじくて横に振る人なほし今の人情とも
変りぬる哉 実に天地造化の所為天に在りて寛の燕
暑熱のうちに大雷雨などおこりのち一天晴となり
たるは
庭の面まだかわかぬに夕立の雲さへ皆たえてすみわたる月のな
ど於政の頃のことなるに日嚴寒大雪にて氷柱の簾
など懸けおる池の水氷りて閉その上をはしりあるきた
兒戯したる
童が水の上をはしらする石にあそびのものとしおさなき

ともまた万葉集の歌のおもむきは年〻にさかりはうつりかはる事めりしか
いにしへの歌よりはやのちのいやしき寒暑もなく雷雨の間にては晴も陰
しがたく一日二日も志川らは霖雨のくもりもなくなりて春秋の頌
歌もとゞこほりてしかも池の水もふかくなりては度々溜るばかり万葉集の
ごとくも偽とまことのそれぞれのまゝのてなかなかは地の宝もある衰へてやう
なり古の如き良材もかくく宣明よりわかれる薬種も新唐は
性もよろしからず古暦など学ぶ儒と古学いふ事を宋学と
あらそひ医も古方など用ひ後世家を嘲り歌家和歌も万葉集で
好む人あまたび易にも古易の論説あり学問の道さへ変り
やうやう物にいたまでいふ事なからず三体詩源編なども
読みしが今は和歌学びしそのさへ希なりぬるは是非な

いかで不寒なるは婦人産しけるに赤子は七夜うちはいづれも目を
眼を閉て生まれ七夜すぎより眼をひらきしが今は生まれながら
より眼を開て生れ眼を閉ざずして生るゝなどは稀なり
しれ天地造化の気も時ありて変りあるらんと思ひよらぬ
事なかりき　石川氏筆記

○三四十年前の比は中人以下民百姓町人は皆揃好る真鍮の胴丸
太造の銀のなりの金銀挿など挿たる家も富家の女子は世帯の人
なども出し揃え金も稀入ても銀の彌ちと細工七筋織揃へしなり
今なりは鼈甲挿は高位贅しか今はうちに今日かはらず参るにも
者とても揃ふなる櫛捥など用ひ又は漢なる小八寸など用ひは三度の
食乏しき程の者も相応の菓子なども揃へ持なりける

町々端々にいたるまで其町内にて小売喰物見世商売店十
軒も二十軒も続き繁華の場所には喰物の商売の外はなく
あるひはきれものも天鵞絨のたぐひ其外の下駄竹履なども
するもの此女の身をかざりて百文にても髪かざりなどは外
袖口茶金ひきなどありて用向なしのものなどは奢なり
人がほしがりたる金銀のかざりがかざりなどありて不足なり
云伝へし古き名の物ならぬ何程の価にても買はざるなりと 同上

○三四十年前のこと草履の其外穿物の外細工物をいたし
かすみたる中に小商人もいれるなり自然
用ひたるは古来にもちひたる当時流行の其品其外
物のひとつ下駄かなど用ひ其世の風俗一般にのみぬすみる事

いまは江戸町人葬礼の送りも大勢の供をもしたるにはなく
香花寺への贈物ものなど駕籠のかざりもあり
それ酒肴茶菓子にて湯豆腐のたぐひなどものあり
それより今の町人は酒肴を出して後へ菓子なし何
程大勢にても茶の料理などにてよろしきを出せり
づ精動して暑中に甘酒を用ひなどせし納豆など
を売りありて夏中冷しなどを売るものの如く
皆時行の品ならざる物を売る世になりたりぬ 同上
理宜云今の世のありさまは古よりかはりぬ
其中には国々の地の穀など
なんと僅かに農民を始めとして士工商として

ごのごお花欲しく武家ハ足更順卑にしも法気の立るを基

順とり合ふ程ハ世の中されしく候ても其外の者の欲も

世の中時勢にて云ものから凶年など打かへ世の中さわりとても

然しむかしハ変なりしが是時変の貽因となるべしされ

いかんとすれ共今ハ太平の御代に治まる民もとにかく残れ

く奢侈を好するものなるべし

○古老曰世間土用干ハ晴天を二日かけてほすべし一日程風を入さ

しくして納る也程なく虫も喰ず色もかはらず我年久く

ためしみたるかよき天気を見合四ツ時より八時までほし

入物も日にあてゝよくさまさぬうちに納むるども

このまゝずして虫さまぬうちもとくと時までは湿気ある

七ツ時より宵ハ湿気出る故小陽の気なる中にほしたる

湿気とおもハぬうちに納ることの得枕など見く腐とわるのミ

塩魚海藻の類あるひハ梅干なども入れたる天気なりとても

日の出より出し亥四時にあけて入るわするゝねものとする七ツ

時ほど晴たるもの也なり〳〵天気もなき天地陰陽の気で変

るものゝこと中々難し　知嚢後鑑

私曰此の一條は衣食の外にもおもしろきあるべし

○大河内金兵衛ある日門外の路地にて[illegible]

扇子を持し物覚録の僧来り人々[illegible]今日我等が

合力を好むず内に[illegible]接して入も寄付く悪足の者

好み順はず一汁一菜の物だにのみ振舞中なる僧なれ

出家程の身ながら似合ざる志や愚僧などがやうなる者が
不精進にて盗み終りてのちえし此の今に至り法流に入りて
生れ付は放逸なる心にて御布施などにつゝしまざりしにて
あさましき貫文を積み得て高ぶる僧と成て頭に兼ねて
これも此方の修行の大事として手を付て其外と心得
られし僧などとらへし志をぬぐひ扇と傘をもちて高ぶる僧げさん
しても世を渡るの為にせよ此道場のつとめ不足とおもひ
かやうなる細い一日が間地をほりてもつかまへおそろしき
かまへよぶさびもらひ得るうちのものへまいる
肉をも又足らでもせめてもわずか理を申す程
にも僧も是非なく夜にかぶりて帰りしと　同上

これ日出精らで以る倹と吝との別である處をさとり
○ひとりの小身二三百石ばかりの御旗本の奥方母義息女妹
までも他行のときは遠方はいふに不及近所にても必ず乗物に
てありけるにその乗物舁も日雇人足を舁せける事もなく
なし手前の中間を舁せし故さりとて乗物なかりける
そしよりて手前の中間も病気にて人足らざる時は親類
中より出るなどかしこの役等一つ二つも程もその人不足
のとき日雇をたのみ人々の事は変るなし役を出すとも舁せざし
などさせるなりけるも氏神社仏閣へ参る時も乗物をかけ徒で
先さへ乗物より下りあるき時も度々夜半などにかぶりてのはかを
つみ目立ぬやうにしてあるき故親類など人の見知るものなし

すなはち息女たちも深窓にかくし人にまみえざるを以
召仕の針妙腰元中居まで外へ出る時は額を霞の文
にて隠しかくし顔をかくして出るも女はさへ外へもなし明暦
の比までは出あるきしけるに深川あたりへ見物に出る事ありしに
万治の比より江戸中の女房衆が此笠を女かちの者はあり
それは顔の上を覆ふがゆゑにあみ笠かぶり深くかぶりし
延宝元年の比までもおぼえて笠をひとへに書と後深窓の比
は松坂といふ所の延宝の頃は熊谷笠といふあみ笠
をやつし八分めり程と吟味してかぶりてもつき後天和貞享
の比よりはかさを止めて菅笠と同一同用ゆ
あみ笠の時分は菅笠は信濃のかぶり編笠は御殿女中計り

かぶりしが元禄の比よりかざしもおぼえて大身小身共菅笠
をかぶりしを下々まで菅笠を用ゆむかしは何程強き暑
気をも雨をも凌がねば家来供をも小菅笠をかぶる者
はなかりしし　古老物語
○くちをのをかぶりてやりかけて誇りかにおもちてだけ被を
そらば世をもむさぼりさづけていくしかるるが着より
かしまた人の家にもなきとむのし唐に許由といふ人
くちささうと外にしぶきつるたくさんす好きなもので手
しるさげたる瓢を飲たくなりとおもしといふそので
人の得たりしがあらば木のうへぶにかけたりす
しかしば風に吹れてからかるをかしかりしとて捨けり

すくひ手にむすびてぞ水をのみける、いかばかり心のうち
すゞしかりけん。孫晨は冬の月に衾なくして藁一束有
けるを、夕にはこれにふし、朝にはおさめけり。もろこし
の人はこれをいみじと思へばこそしるしとゞめて
世にも伝へけめ、これらの人は語りも伝ふべからず　徒然草

○人の身にやむことを得ずしていとなむ所、第一に食ふ物、
第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事この三ッには過ず。
飢ず寒からず風雨にをかされずしてしづかに過すを
楽しびとす。たゞし人みな病あり。病にをかされぬれば
その愁忍びがたし。医療をわするべからず。薬を
加へて四ッの事求め得ざるを貧しとす。この四ッかけ

ざるを富めりとす。此四ッの外を求め営むを驕りと
す。四ッの外倹約ならば驕の人なかるべからん　同上
文段抄に云、此四ッとてもおごりをなさず程よきなるに
其外にもとめずして倹約にかなふの義也

○太宰独語曰はく、百年此のかたの風俗を考ふる
に、凡天下の事は江戸の人の風俗豪奢になりての
のちは、慶長元和の比までは其比の男も女もあま
寛永の比などは年の頃もやゝ男は羽織革の
うちかけ革の袴などを着し美服とし、女は紫の織子を
はくなどよきたけなる事にていまだ織子はつねに持てると
まれなるあやしきなど見えけり。婦女の帯は金襴などの美麗の服

とし黒地に梅桜松など霰織付たるを用ひて襠の木帯
と號けゝる珍重しけるに用ひ絛尺一寸斗なるを縮など
へうたるもなし四月より八月まで婦女の乳抜の帯廣さ
絛ざし八分ばかりのをあつらへなるかたにしてそれに結びたるを附帯
やうたる今の附帯なるとかしれたるの帯よりも廣し今の
人にむかしのさすがこのくもは麁云と思ひて売行もせず
むかしは我まの行の兄弟のをしへをも伴ひて遊ぶ
かしたゆあらず紐をもつ人あるは君紐ともなし縛て
男女の衣被帯なとをかれて賀書して男子女子も十四
五才までは着たる紬をおりてむかしは絛尺七八
寸を極としたる貞享の比より部尺そのかはりたりとも猶よ

近くちくゆるこそ頃者部尺四五寸に始めぬるなりといふ
婦女の帯は貞享元禄の比より漸廣くなりて今は
絛八寸に及ぶ是猶など出来し裃の肩衣など男の肩衣
といへるの着は麻の物ぞ絛ざし八寸ばかりのわりをとり貞
享元禄のとりわけしをかぶきそろへて及ぶべき寛永のころ
までは婦女の髪など束ねる小麻縄にて結びそのまゝ
黒のもとゆひ結ひて巻しに其後麻縄をやめて髪に
結ふ時髪は瀧ぜんの紙より紙をこえ元結といふもの
つくりおしに海内の婦女ことごとく是を用ゆるに其よりは
元結とて紙をもやめぬと家文正しくゆるしたるにも
給つて学ちのとある云云

露木連信云此事に付て思ひ出せる事あり安永
のはじめ予七八才なりしが其の比の子ども
の髪を結ふにハ多くハなんとのつらといふものにて髪
の先をけしかけ付けて結ひ又束ねたり七十余の老
嫗子供の髪を結ふをみて嫗が曰く今より以後ハ牛房
となく子供の髪を結ふありてなんこのつらをば用ゆる
ハ今のならはしなるより手づから紙捻を製し用ゆしが
今いえ結ひを用ゆる事もなくなりぬといひきたりし紙捻の
のみ絶て知るものもなくなんとなんのつらさへなくなり
ぬ享保より安永まで凡十年其の安永より文政
まで凡十余年余の世の沿革かくのことし

理斎云むかしハ家々にて小髪わ入といふものありて入て
髪あげあげての法ハ藁にてただねりても男ハ別として
といふはやくあげぬ六十年前まではハ女子の髪ぬ前
などにも用ひ又結ひ元結をかけまけをかけけれバ大小共にかけ
つくりぬれバ其の後髻に笄掛けともいひ
世にひろく用ひ又ゆひなどのありやを今いふところの
之を抜き出て切たる上の結構たる切きて價
甲女がずるの上にて笄掛といへる物にてなりぬ比の末
の頃のいつ頃よりの事にて
○およそ男女の髪のうち表方ハ及ぶもいかならん
らんかハむかしより昔まで又古の婦人々の髪ハ多く

なかれわたりしけにあたらしとて髷のうつしにたくみをつくす
髪すかたも短くなりてしのひする風俗となれり但女ハ髪の
うちにも切ある物ハ剃をゆかしとする世の風俗京の婦女
宮川筋茶屋にて出たるも見えず都の男女の風俗とも
紫のひ揚の名まで見えたれハ京に似ならひけれ但し
京も公家の外工商なれどいかなれとも柔弱にして利にかしこし
さて江戸ハ武家の都なれはいつまても人の心粗暴にて利に疎
かりしか此ころ三十年このかた江戸の人京の風俗を
まなぶゆへに武士もおのつからその気象京の婦女の若く
紫衣するもののこそいまだ江戸に移りて婦女外ハおるすま
江戸ハつみ見するのみにあらはし今日後縁にて江戸

されバこそ宝永のころまで娘なりしもの今ハ七十にあまりたるが頭巾
いふにたかふのくふうあかりてさへ打かけしなれやうなる
このわさくるしハ世にはわたりそめしゆけしも見えず男ハわかりて
さハいつも帽子をそのなかに此ぞらね編笠を肩の上
までかけるなどにも被るハ今川らしくゝ頭骨のやうなる帽子
さかんなりてなかゝ今もある老の頭巾ハ霞石のやう
なるもののつゝみ包みて目ばかりを出しくゝ見をするも
あつきむかしの女のかしら人目を忍ぶこの多くあるる
今やまくハ此ころの男ハ小袖の袖長く裳を用いあるひハ頭で肌
衣としく袖口もうしくして腕なとてるやふありうにして有
なりしかハ女ハ襦子のまうかふも裏なとも着るものそもく

男女家をおさむべし　太宰獨語

○秀吉のころ大小名雑費の為に拾六人連判にて官銀拝借を願ひけるに如此姓をはからひて知行を寵し家不如意といふは平生不覚悟なるより起ることの外知行を費すれは費えしとの御沙汰也

堀川公申さるゝおよそ貧窮困苦ほど憂きことはなし家すでにかたむまでは貧しく窮する方より償ふは天のさだめしかるべくつとめてなりの了損益を御内意ありて黄金の拾枚づつ用立させられし志のまじくとも当代御倹約ありて名古屋御陣中にても一汁一菜の御掟さて奢の外に是ありし事から恩沢の金銀を御費なくて拾のあまりにはさら御情をなし　扶桑太平記

○凡家内の平日の用心は右にいふべき事として来一年来年の秋まで此粮米をかぞへ尤も塩醤をたくはへ補薪を他国薪炭油をたくはへてより以つむべし右の勝たるなしがたく家の計をなすべし奴婢のあるときはその衣食居所を察して飢寒をしめずそのところを得させしむべし男女内外の別を正しくすべし武士たる者は鑓鉄炮杖挟箱を常に使ひよきやうにととのへ置べし其外常に用る器など其の外をなく器の損じたるは修補し家宅庫橋梁の破損せるをもともやく修理し材木竹土石をたくはへ置くべし馬銭よく飼ひての外家の子なるべき畜類をやしなひ菜蔬草木時に応じてのひてうゑやしまふべし蔵のあけさし心おくべし入用

ぞ察し盗賊を防ぐの用心おこたる事なかれ　家道訓

○光圀は水戸にて独あるきなされし時に雪ふりたる時出家に
出であひたるふりにて御自分は何方へか参らるゝやと
と問ねおしかへせし所に庵主に水戸光圀の後にて参られし
とゝ中黄門様には宿かされよとも申さずと問はれけるに宿をかし町宅
致し申さずとなりしに然るは自分の所に庵主ニ一宿させ致
させられ給ひて後ち是は出家に光圀とも知らず
しとは御座なく其後ちに御隠居所へ来遠様七付
近田煙裏の火をあたり四方山の咄などの咄あり夜ふ
更ぬれば自分も眠くなる御自分も休みたまへは枯に
行くも御寝所にいりたる其の出家は寝るとし稍又時まで

寝られる様小坊主来り起しけると四方をかひありけるほど
三方押入その内に書物一面に清書あらされて御こもるこも
何人ぞと小坊主に問ひけるは水戸黄門様にて御座るとや中ゝ
出家大きにおどろきたりて様を冷しぬけんとそして光圀は
御おもしろ先ツ四五日も逗留あれと仰られしが出家宿
休しく御前様らる有ても其外ともに候でで御所
られは枯とや中がしも苦しからず逗留あれと仰られし
用ありてかへりて遠く御暇申上げしが志のうへ路銀を致し
下され金子を其ヶ下されし　武林隠見録

○水戸御屋形に百事萬事ほどの御座敷事習ありし事書しくも
光圀公御入りあり候ども事習後より不ぞ為入御ぞ写候いて

御入不足なれども取りて御ぞ作らるゝ事は中将殿はいまだ入る事
ざるなれども家来へ見て構ひなく中将殿は御孫子なれば
当時は御家督相続ありと申すよし　同上

○光圀卿御隠居ありて山林に引籠り給ひ西山荘
と申す所に田畑をもち耕作なされ年々の年貢を百姓なみに
出させ給ふ郡奉行代官なども心へ百姓よりの用捨
するにもあらず定の通りの御立役ありて年ごとに納め
用捨なく仕上候を年々郡奉行代官検見に出
らるゝにも御慰あらるゝに其年の相子定方の免は御
せぬ様にて御立役あるゝにもおなじ事は御慰
あるに依て随分に遊事なりとある事にて江戸より

上使ありし時に先御拝見ありて　上意の趣御聞済ありて御容
座ありて後光圀卿家来を御隠居の茅屋へ呼て参る事
らぬ様と申して町衆御呼あり　上使の仁にありしと申しても
しかし其の住居を御見に入る事じや弊なる竹の折戸の内へ
入りて内に小さき厩の見ゆる馬ま正あり　其御隠居の屋へ参り
ましてた此の間御居間の次の間は則火焼所なりて
奴も人居らるゝかとも申し則　上使御覧ありし時は其茶多
葉粉盆御出しなどをみるにてものなるは珍客人もなかるべ
かなと遠慮ど隠居の事なれば万事不自由なる
さ様にても不叶なしても出来合の粗膳まゐらすべし
将し此様にて戸棚を御あけ其内より器御

おし件の奴ぞ御呼び次町へ行て新吉魚てしの一番多
ゐるしとおすりきしくましが畏りうけおし志ぢうくして
大ゐる鰹などを本引提げあるを寸ぢきちの自分ミ先ゐ板
を庭ニ並べ恵さう分家ぞ判分ミらぬ中打ハ汁ミ致しをと
と彼奴ミ飯汁など持さうを一汁一菜ミて到御相伴彼の奴が
給仕して御振舞お済ミ御膳中上るとて光圀公仰には
上使と何の気ざ来りしもんとあきしれあてなし奏て来性
を来りすぎし中へ繁くて重り去しぞ一ゐる引ちをを
鞍皆々来りを座し一所隠居の身ぞりもまで此侭さぶせ
とて来りするとて早ゐる別の礼すよ江戸ニ座場りし
とし　同上

○元禄三年西山公役人ヲ仰付られ中老ミ雑穀をたくハヘ中
ゐし飢年ミ民ミ施しまうして幸年なりとてつたきぞ鰥寡
孤独老癈の族ミ施しあたへ下中御掟なり　桃源遺事

○西山公ハ慈郡太田の西山ミ御隠居不ゐ御居住御稿ふゐる
ににて御自分西山の隠士と御称し御稲ゐ御家作の外
ゐすらゐしニて御百姓の男女まゐるみかくれ病身ゐ
ゐ江戸本の御年ニ比てゐしうのおを御任ニは御隠居
ぞんも員数御定不ゐれは隠居衆んかくれはあゐで
批判て下ゐ多うくれ西山など批判下したをで多かにはいかにか
も員数など定まるて事ミの今日三不及かゐるがきのゐるで
まかく仰らせし員数御定不ゐれは　同上

○西山公常に御茶の湯をバ御好ミ遊されず数寄といふものハ
器物の数々集むるものなりとて御隠居後も好ミ給はず
山をも御好ミなる御膳御仕舞も御山を好ミ西山にて朝夕の
御膳をも一汁二菜に限り給ひ淡薄なる麁食をぞ[illegible]
御小袖も綿紬などの御召なりし御定紋も御用ひ給はず丸の
内に梅といふ文字を御附なされ御挟箱にも[illegible]
絹の御着衣一ツの外に何も御用ひなされず御隠居
後は天下の御為なる事に御懐着の[illegible]御自身御床の上におわし
まし[illegible]御心を用ゐ給ふ御事不尽 中略 西山にて[illegible]
寿[illegible]香[illegible]御[illegible]民を[illegible]
[illegible]御[illegible]本縁を御[illegible]附会を[illegible]

民に農業を御教ゆ給ふ 同上

○西山公御逝去の年御病中にて湯殿[illegible]道より御前に
お詰め[illegible]その者を召し給ひ[illegible]世に汁挿[illegible]
[illegible]を[illegible]の[illegible]
といふもの[illegible]一汁一菜の[illegible]
餘時分汁を鍋の[illegible]座敷へ挿むる[illegible]味[illegible]
[illegible]の[illegible]なりし[illegible]と[illegible]
[illegible]倹約の[illegible]諸士及び百姓町人まで
[illegible]相[illegible]旨[illegible]
治世[illegible]容[illegible]
[illegible]相[illegible]付大森典膳信一西山[illegible]
[illegible]汁挿

なし再興仕りとの事なり御不興仕りつゞ自然と城下を
及び所用之乘輿並ひ振舞はおし止め何事も思ひきらす
仕らずして後之仕の出入り致す汁の樽なとくじ免ゆ箸と云
合せ家西山公の御病氣の節も召ありあらせ給ふの御遊去らぬ汁の樽
まて度まで定め物分のよし仕め右様の度々すれは　同上

○板倉内膳正重矩先年本所へ邸宅を給り住居せられし
ときいろ咬菜軒といふ三字をかけ席上の出入なかりける茶
栽を設け自ら手作りなしける野菜を大厦言當く類り
なくしくて外に所るからみてのりしやうし
此僕なと出入りしもの此物好き三竹法眼と此名は小学の
敬身篇に曰汪信民嘗言人常咬得菜根則百事可做胡康侯
聞之撃節嘆賞しあらたん重矩の座右としたまひし
なり此の邸を今彼家來松原作右衛門といふもの拝領す
しとこ

扨ある大坂京師の勤役にて右の邸をとられ掛け来れる
其後諸の口の御役を務めしとて彼の額を掛置きしとぞ
彼三竹法眼あるとき今小尋りて此三字をと用らる意味
なと尋ねけるに内膳正答へていふとの家など立てる名もあるべし
すべて何もの識を設けつゞくものし家不肖の身なれ
今まで家を老中列座に加わる事を務める易きものなればこそ
ありけるを思ひ出の本所に入れられる住居としての下ぞ
所時を寺ふする事しけれど今言思大猷家にいふ不相應

なる故諸芸もそれぞれにわかちてあるなるべし挨拶あるは
しかるや武人生まれつき実儀深く諸侯大夫の進物と
披露するさへいかしく内用捨なされ右等物ならず
おしはかりておこる後休息なさるへしこのうへ一品到来物ある
よろこびをすて拝領の物をなくさめてまさる支度をし一家親
類をおもひ家計あまりにおよばねどもあるつくろひある人は
屋の着物をしつらへ裁ちわけいりあまる故にしかとこそしらば
重縄数々の不富を取り自分の身に君父の賜りものをもつはら
新しくはかりておもての衣のうしろを今かへる分に役義を勤
る時は随分に内緒をちぢめ大小の着物までを
おもいやりより賜る料所にたまはる故に紋裁中おもてへし

ときはしもと重縄左右のことあるうへ倹約の法を
定められまづきびしく仰出されけれども拙のこの
類ふ

抑兄なるおんみも支てもたちのつゞきにておる身にて安く
後水尾院のおほんうへ御田の枕のむら雀をしもえある
身にまだこのしたくれとある御製とうちかゞくしうる意味も
重縄つまびらかに仏法周済も宗意のこのうらをたる
に倹と吝とおなじからぬその元たてたおそし倹なるの費をはぶき
奢らずして用ゆべきをもちいるにはおしまず財を用ゆるは吝とはいふ
に其器の論なくもちいうする物をおしむるを吝とはいふも同
じからいはぬしらべしらでまじく家ひとのおもひある者の中

ものゝふなりけるのもよく聞ゆるその心ざしの気色のやうなれどもけんせ
ぐずなる直言する人は道理至極なれども言辞の無礼なる
を深くして悩む者ほどなすべきやうのなきものなれとぞ

板倉重矩傳記

○戦場に生れ合ふる武士は毎度軍に勝つ故の天下も具足の上に
千付たる者なれば冬の寒中も具足物に冷たる難義千万なり
といへども夏の時の寒さ暑さをのがれ漬ぐるたとへ佗のゐるもなく
雨ふる時も雪ふる時もいふべしとて野にも山にも鎧の袖を片しき寝るに
しきのそおのゝずる食物とては黒米飯塩汁より外に給物
もなく或は戦陣籠城するには籠城中の辛苦待ちおもひあるに
難儀とも苦労とも思はで万世の安きにを肴有ぬるべ寒てん
あるとをいひ治世の事役供役などいれなさいは心易き義と給ふに
そのやうなるを勤めいはれたることのゆるさるゝ事様のふしみる
たとへ夫のおもひいつであるだにことあるべき武士の中黒きは如き
船のうちにおもひゆくならずとも武門に生れた男たる者は甲冑を
枚すべく山野海岸を住居とも行はずしてなり叶ふる義なる
ゑ天下静謐の時代に生まれ合ふる故にきとも織ともなる故
をやけかなる若海霊とよう好相当なる好みはうの様しる
安楽を渡世はするとあるは相も大切なる仕合のなきを若悟後
しはたで座敷内の事役近所の供役使役相なる若労大儀は
といふるごとにおもひゆるを甲冑の武門信玄の家老
の中に平剃の弓矢の功者と名だゝるとよばれし一ぬ場数に
すゝる侍も戦場に多く存じて中宇が出きもと勢ひ鬼をむなせの

無用に仕るよし申伝ふるところなり初心の武士心得
のため仍如件　武道初心抄

○本朝中頃戦国とおもはるゝの騒動一とたびしづまりて幸ひなる
かなしなる西は島津が東は北条に加藤に伊達が南部のと家居を
やうやう治まりて勲功をあげ武勇いうばかりなかりし
まゝつゝしさは足なくそろふ小のさまたげもなくあつてはけん
まさに心ふうしたいる事にあらずや山人おかさ老病は紙帳の
うちなしおかず蒲団のうつりをさへたのしぬふこのうらみ世をすて
おあひなれども山野に宴息なく凌ぎ路次に流浪なく思ひなせ
かれなをであつちあるべく終出しわれん今きまの御代にすまはる
久のくさのあきすなわかにあつうねのちゆるまゝふしくて君臣は
礼なきをんじ父子は孝なつてこそば外戸不閉途不拾遺たる
おやまもなきこのおりしむ人もおなり帯を結げて寝むんと
あつちうさきを忘れて伝はらずや人々たのしくもおのづから
伝るむ　醍醐随筆

○古しへ戦国のころは将士として千辛万苦して甲を披行軍を
休むことなし父母兄弟妻子誰彼をわすれちりぢりに
小離散するのうきなかれ親戚故旧なにもせず旅に野様
道つねのうさく貴人高位の人も飲食衣服飢寒で壊
ぐまざしやすもすなはち飢寒の難あまねく済して諸士ちよと
さうなりてあつちなかひとりなりなぐ外に楽しくて
たもちて及ばずしく今日の太平安穏なれば楽しむべし

今二百年来海のそと山のおくまで干戈なく穏かにし
後つゞきたる大平の御恵は何不足なき世なり
生れぬ先は軍といふ事も双紙の上のみきゝたる
なればこそ其のゆかし父祖の上の事を聞ば治乱の事に
まだ生世のありさまを今おもひあはすも中々楽し
くこのぬるも此世ご苦しき経ねば楽にはしらずや
〇さいつ比十二三才のおりひとり行旅をなしつゞきての東ゆ
き楽へ参りける程先軍勢催促ありて前途する
もたゞ生涯二度帰らぬ別なりと老たる父母妻子の歎
き思ひあへるもたえがたくのがれし骨肉の内にはあり
なからんやたゞ一歩も帰らで今生の名残

くもなきばかりいはん方なし此のつらさをもおもひ出さてありしが行く
先々険路切所をいとはず今や敵よせくるか此の森かの山
落て敵の伏勢やあると安き心もなし道の傍に腰を
掛る暇だになく味噌の案内もあるはよしなき事なり
食のはしり引裂て喰終まで湯茶といふも及ばず水
をだに飲ぬるも多くのる事しまるやがて打出行つく
陣営に至りても宿陣小屋といへば休む事もならず
竹木を截りて小屋をかけ細引もてしばりかけて
渋うき幕あるは天井四方をおほひ表うちにても子らが
いたのうへに茅葦などたゝみし其居所寝所のみ泥障
具足櫃の覆皮など敷て居る事にてまして米

やしなふもの〳〵の薬物をもちひて悪果腸にそへて焙
これへて、あたゝめて汁やなしことも合しく皿にたすく
るのちをきても時によりては一日二日をし合をざる事多し
なる果なそその隅に合るすもあるべし気絡につまりてそれ
人の肉牛馬の肉木の実なんの草木の葉まで薬なと合しする
水と湯と毎日く山川切取険難救里のうちなと鍛えて業部
つの時にても湯なとをふりかくるひきかて速すといふすなるそく
敵中にても敵のと敵村の家づたひくて甲冑なと枕とし
すこしまどろむばかりにて敵具とても志らくて手々まいて家をそれ
時も波のかく苦しき坂と夷りも数敵をまづるをあそれはぬ
ごのちに危をさうひはふ又波がりて体いのうしいまはまどろむ

ともなれば本陣より二三町の間をも吹立ては諸手一同に起
うちて陣のしるし着具なとするも先立するもそのふのぬく
険難切所なりとも嶮岨救里ならぬしけふあるべき日も
ありて敵も右のぬけかさて敵地に入てさてまさうけれ
いつくひいふそのりもあるまじきなり戦の場に臨みとる
は互に矢炮飛ばするあひだ雨のふるごとく昼夜日にかぎらぬ
ものなれば瞬息の間に生死存亡のわかれの境なれども
やもすれば家をかへり心地もするなれど義をも励し
気絶したるとも進て敵城汗手の歸このけらも骨を
山野にさらし義の重きをおもひて恩の深きを感ぜずんば
一歩もすゝまるべきにあらず仕合よき人の命をとうしな

さればさもこゝろの物むなしく身ともあらず住(すまひ)のうちに
あるは無智(むち)なるまゝに甲冑(かつちう)をきて山野(さんや)をさまよひ刀
弓矢(きうし)鉋の寒暑(かんしよ)に臆(おく)して風(かぜ)に吹(ふか)るゝ雨(あめ)に徹(てつ)し
て嶮(さか)をこえしきを跡(を)なくしたる時によりて深(ふか)き谷(たに)をくゞ
るいとふなかに一夜(ひとよ)二夜(ふたよ)ながらも縄(なは)柵(しがらみ)にあるひは野(の)行(ぎやう)浮独
中細(こまか)引もみちも岩窟(がんくつ)霞(かすみ)も覆(おほ)ひばかりなるべしあるひは
森林(しんりん)蒼原(さうげん)などの中にかくれ居(ゐ)て息(いき)をかくすものも
ず薮(やぶ)坂(さか)蛇(へび)百足(むかで)なども毒(どく)虫(ちう)とまじはりて昼夜(ちうや)雨露(うろ)をしのぎに
かゝる寒暑(かんしよ)にやぶれもだえて病(やまひ)も多(おほ)く猛(まう)獣(ぐ)の
辛苦(しんく)艱難(かんなん)いふばかりなし幸ひなる事もあらんとも
ちて安穏(あんをん)に住(しづ)の有いろあれば推(すい)量(りやう)あらざらん千辛万苦(せんしんばんく)

の中に一ツ二ツもあるまじきことにて古(こ)戦(せん)場のいふかぎりなくおそろしく難(なん)
ありといふべき今の世(よ)は父母(ふぼ)兄弟(きやうだい)妻子(さいし)諸親(しよしん)親類(るい)まで
まで飽(あく)まで食(しよく)し温(あたゝか)に衣(き)て雨露(うろ)霜雪(さうせつ)をもあつかふにも
なく千里(せんり)を粮(かて)をつゝまずしても飢(うゑ)るおそれなく深(こゝろ)く寝(ね)る
わしき災(わざはひ)にあふ事もなくして住ひのあとはさはがず手(て)にまかせて
つね常(つね)もあらぬ所にては川不足(ふそく)なくこのはの世(よ)に生まれ
あたるはかゝる幸(さいはひ)や乱世(らんせい)に生まれ合をおもひうかべて
古(いにしへ)の乱世(らんせい)をいふべき今の世に生れあひたる幸(さいはひ)なし
楽(たのし)みをぞ外にもとめしは物思をうけて恐(おそ)れなきの
あるの楽しみ不足(ふそく)なかるまじきなり今よりは安楽(あんらく)なる
まふあそび楽(たのしみ)この心を忘(わす)れこの心を果(はて)をあそびの

たゞ人にて身のほどをすぐる事多し。戦場の武士の辛苦艱苦
など思ひやりて今日の我身など楽むべし　燈前謾録
上件に記すおもむきのごとし。戦場の代ハりあるとはいへばこの
ありがたきつゝがなきはなへきに四海波しづかに
治まれる御代に生まれ出づるは何の幸ぞや。さらでも古への
の事を思ひやり今のありがたさこのうへもなきたのしみと
おもふべし

天保元年寅十二月　志賀理齋忍識

三省録附言下終

忠信ハもとより。雖然驕泰を嫌ふ事易身ハ世人の
常情所是なれば太平日久しく四民鼓腹し
富楽むの財に象遂て。或ハ酒やもりて世乃
奢侈華麗を尽て盛事とするふその楽。
理斎翁ここに感あり。おそらくに三省録を著ハ。
翁已に没して今を距ること数年。先見尤明
なりと以ふ可きか。一日修德齋攸静山主人

事と文情とに厚し。談論晷を移すたまし
時勢にこゝに及び。即三省録を把て一れを讀
に。維昔覽杯の風流歴々として見るべし。ゆるよ
ミ足論ずるに及ばず今を視るときは姑らくの
昔を視るがごとしといへども。豈唯世乃凌夷に往也
むや。一張一弛は古のごとし。民に父母たるもの
命哉。律令にあらざれや。書生の窮措大すも

すまバ。史傳を議し治亂を論じ。劇談今年
を抛ざるものといへども。もとより無用の辯不
急の察而して屠龍の技を学ぶに似たり。
三省録ハその法にあらざれ。實に世人に裨益阿
らんと事の辯を待ちて獲るもの。王侯經世済民
の術へ。富國強兵の基をなさんも。今吾輩が
僞をなす業を勤むるも。所謂財用をなむものが

なる大道あり。一生之を為るものハ稀なり。これを
用ゆるものハ鮮なれどもいりいでやその詳なれ
法とを知らんとおもはゞこの三省録を讀むべし。
あまねく理斎翁の人となりを知らんと思はゞ。
たゞこの三省録を讀むに在り。天保みづのえと
らの歳秋日。山崎美成しるす。

三省録跋

余嘗讀理齋君之行狀而知為廉潔之超于衆今又見此書而得為警戒鑒古之要嗚呼昇平之久上下日趨奢侈勢之所為不可止

也郷者
官華驕惰之弊過汎濫之
勢故民将滌其舊染而帰
於倹素矣夫驕惰之原皆
起居處衣食之不節如不
爲之禁制使人任私情則吾

未知其所窮極也乃著世編
於救時弊其裨益蓋匪浅
鮮也余友徳齋継父之志
今梓之木使人々省破家亡
身之基生於世三者之戒
也天保十四年癸卯孟春

翺齋　海老名絅撰

国立公文書館
National Archives of Japan